

祈りの復活

国選択無形民俗文化財に指定されている百村の百堂念仏舞。平成24年、担い手不足により一時休止に追い込まれたが、翌年、関係者や地域住民の思いにより見事復活を遂げた。その背景にあったのは、地区と学校の関わりの中で生まれた児童の一言だった。



【百村の百堂念仏舞】

百村地区で五穀豊穡・家内安全を祈って毎年4月29日の鎮守愛宕神社の祭りに奉納される念仏踊り。かつては盆行事の一つとして村内の数多くのお堂前などで演じられていたことから百堂念仏舞の名が付いたといわれる。統合後の高林小では、毎年6年生が舞手を担っている

木々が淡い緑で染まり始める4月29日。百村の光徳寺前の通りでは、色鮮やかな衣装を身にまとい、練り歩く大勢の子どもたちの姿が見られる。ところが、ここまでにぎやかな光景が見られるようになったのもここ数年の話。平成22年まで百村本田地区の子どもだけで継承していた舞は、担い手の減少に伴い、24年に休止を余儀なくされた。(23年は震災により休止) 念仏舞も舞手の人数が決まっておろ、その全てを揃えるのは簡単ではない。1年の休止期間に復活させるのか、このままなくすのか、地区で話し合いを重ね、「大切な文化だから」と地区の間口を広げて継承する道を選択した。保存会のメンバーが当時の穴沢小学校に通い、3年生以上の児童に舞を指導。統合後の高林小学校では、毎年6年生が初々しく一段とにぎやかな列をなし、愛宕神社に祈りが捧げられている。

長く受け継がれてきたものだから伝え遺したい。地区の皆さんの理解と子どもたちの勇気に救われました

「華やかな衣装を着てみたい」。これは、念仏舞を復活させるきっかけとなった穴沢小6年生の言葉です。平成23年の東日本大震災に続き、翌年も担い手不足で休止に追い込まれた念仏舞。昭和34年の復活以来、百村本田地区の子どもだけで舞を継承してきましたが、ここ最近の子ども的人数では、休止せざるを得ませんでした。

そんな矢先、穴沢小6年生の授業で「民俗芸能」について話す機会をいただき、それが縁で復活に向けた話がスタートしました。まずは、その年の9月の運動会で披露するために練習を重



小高 貴左雄氏
百村百堂念仏舞保存会 元会長
(平成17～26年まで)

地域の結束を強めるもの。
郷土愛を育むもの。
その核となるものが
民俗芸能だと思っています



江崎 裕之 旧穴沢小学校長
(埼玉小学校長)

小高さんに提案いただき復活となった念仏舞。復活して5年経ち、穴沢小も高林小と統合しましたが、今も変わらず受け継がれていることに感謝と安堵の気持ちです。

復活に向けて動き出した年、地域の指導者に教わりながら練習に励む児童の姿が、とても印象に残っています。翌年の4月、神社への奉納の前に「学校として参加したい」と地域の方々に説明したところ、慎重な意見もありましたが、結果として受け入れていただきました。これを機に、児童は民俗芸能との関わりを通して、さまざまな学びの機会を得ることができたと思

ます。地域の人との触れ合いを通して人の温かさを学ぶこと、伝統の継承という役割をとおして人に認められること、こうした成功体験によって得られた自信が新たな挑戦につながるでしょう。

児童は学校だけでなく地域によって育まれるもの。学校も地域の一員としての役割が期待されており、今回の取り組みはその一例です。地元の文化を知り、それを次の世代につなげていく。そうした人と人のつながりを通して地域の結束を強め、郷土愛を育む核になるのが民俗芸能ではないかと思っています。

今年で卒業 「学んだことを後輩に…」



大和田 颯馬 くん
高林小・6年

穴沢小出身の大和田くんは昨年4月、3年生以来の舞で太鼓を担当した。「みんなが見ている前ですごく緊張したけど、無事に踊り終わった後は達成感がありました」と、当日を振り返り、「覚えたことは練習の中で5年生にしっかりと伝えたい」と微笑んでいた。

念仏舞に初挑戦 「不安だけど頑張ります」



池田 蓮 くん
高林小・5年

「鉦をやってみよう」と話すのは戸田小出身の池田くん。授業で念仏舞について調べ、難しい歴史も学んだ。「舞も難しそう」と、4月の本番に向けて不安を覗かせつつも、「みんなに見てもらえるよう踊りの練習を一生懸命頑張りたいです」と話してくれた。

